

地域の生活に寄り添うクルマの在り方への問題提起と提案
—生活者へのライフストーリー・インタビューを通じて—

【 要 旨 】

ソーシャル・イノベーション研究科

ソーシャル・イノベーション専攻

2024年3月修了

堀江 信彦

【 要 旨 】

“100年に一度の大変革の時代”という言葉に表現されるように、変化し続ける社会へのクルマの対応が求められている。本稿はクルマが生活に欠かせない地域において、人の生活に寄り添うクルマの特性や価値、人とクルマの関係性を定義し直すことを目指し、これまで当たり前と考えられてきた価値基準への問題提起をしながら、今後重要視すべき価値観を提案することを目的とした。

先行研究としてアニミズム、マルチスピーシーズ人類学、社会物質性を参照しながら、「人がクルマを使う」という前提に立ち戻り、長野県在住の7名の生活者へのライフストーリー・インタビューを通じて人の生活に絡まっているクルマの特性を抽出した。この中から「クルマの生み出す車内空間が内なのか外なのか曖昧な特性を持つ」点等に着目し分析を行った。その結果、人とクルマの関係性を見直すために、価値が生まれる時間軸や、わたしとクルマに他者を加えた「一对多」という捉え方を加えることを提案した。そして、それを現在行われている移動に関する社会課題への取り組みにどのように活かすべきか検討し指針を示した。